

まちやわら、そこに住む人ひと(ざいち)の、知恵や生き方(ち)から学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニューズレターNo.32 2011年6月



京都大学
学際融合教育研究推進センター・生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

今津町椋川 牛で代播

朽木フィールドステーション

余呉鷲見の焼畑 (1)

朽木 FS 黒田末寿

私たちが余呉で焼畑を行えるのは、永井邦太郎さんを始めとする、長く焼畑を行ってきた経験がある年配者が地域にいるおかげである。火の恐さと同時に火がもたらす効果を熟知した人々がいなければ、山に火をつける試みが認められることはなかったろう。こういう人たちは、慣れない者には不可能としか思えないような山仕事を楽々とこなし、山の恵みを豊富に引き出して山村で生きてきた誇りを堅持している。このレターで何度か書いたが、「生存基盤としての〈百姓力〉」、ことに〈山の百姓力〉をもった人たちである。

そうした焼畑経験者の一人に、久保吉郎さん(80歳)がいる。久保さんは奥丹生の鷲見で長く焼畑をされ、地域固有の「鷲見カブラ」を栽培し続けておられた。また、熊撃ちの名人でもある。先日、鈴木怜治・増田和也両研究員と黒田で、鷲見での焼畑について久保さんに伺ったおり、ヒエ・アワ・ソバの作付けや鷲見カブラの独特の形状、そして種を播いてから鍬打ちしたことなど、これまでとは異なる情報を得た。また、焼畑の循環のとらえ方に私なりの理解が進んだ。それらに関して2回に分けて報告したい。

鷲見集落と山の利用

私たちが焼畑をしている中河内から、高時川に沿って東南方に下り菅並に出る10kmほどの道路がある。現在落石と丹生ダム建設予定で通行止めになっているが、この間にかつて7集落があり、鷲見はその中間、大黒山から東に流れる鷲見川と高時川の川合にある。近世から昭和40年代までは20戸前後の集落だったが、過疎が進み、平成17年に残った人たちがすべて余呉町に集団移住した。私有林はなく昭和30年代の登記では千町歩余の共有林(滋賀県市町村沿革史、実面積は3千町歩)を有し、もっぱら薪炭業を営んでいた。大正のかかりに近山の使用権だけを割山し、一戸あたり1町~3町の規模で7枚もっている。



1975年の鷲見川と集落。久保さんの家は右手奥。(写真：武邑尚彦氏)

現在は全山を生産森林組合の管理下においている。11月始めには初霜、積雪量は4mを越し、12月から4月まで仕事はできなかった。

焼畑の名称・場所

久保さんは若いころは炭焼きし、竈一つで5月~11月までの間に900~1000俵(炭俵は15kg/俵)を焼いていたが、炭が売れなくなると、伐採の仕事に移った。

焼畑は昭和37、38年頃まで村全体でやっていた。久保さんは、余呉町に出てくる終わりの方では山でなく休耕田に火入れしてカブラをつくった。山にある畑を総称して「ヤマバタケ」、とくに焼畑を指すときは「ヤキバタ」と言い、それらをさらに、作物でカブラバタケ、ソババタケ、ヒエバタケ、アズキバタケというように呼んだ。ダイラ(平地)は畑(常畑=畠)にした。水田は谷沿いに少しあった。反収4、5俵もとれたら上等だった。肥料は若草を直に田に入れた。

焼畑の場所は、個人の使用権による割山の中、炭焼き場の下方で、ほとんど谷沿いにあった。多くが、村から3~5km離れたほとんどカヤで占められるカヤ場のようなところ(カヤバシ=カヤ場)を焼き畑にした。雪崩場で大きな木が育たない場所である。

カブラ畑は石がガラガラしているようなところがよい。ソバ畑には石がない方がよい。これは、収穫時にその場で叩いて実だけを持って帰るためにも小石が入らないので、都合がよかった。クワを植えた桑畑も伐って焼き畑にした。(続く)

筏がつなぐまち～保津川筏復活プロジェクトの意義を考える③

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

これまでに述べてきたように（ニューズレター22・26号）、保津川における利用と管理におけるレジティマシーを獲得してきたのは船頭衆であったといえる。しかし、1980年代から90年代にかけて行われた、旧国鉄山陰本線の複線化工事による保津峡への橋梁架設や、上流での日吉ダム建設といった巨大公共事業は、保津川をめぐる遊船あるいは漁協と行政との関係性において、微妙な力関係の変化を引き起こした。

これらの工事に際して、当初、船頭たちは景観や河川環境への影響などを懸念していた。ただ、いずれの事業も船頭も含めた地元の長年にわたる強い要望をもとに進められてきた経緯もあり、積極的な反対という立場をとりえたわけではなかった^[1]。特にダム建設については船頭たちが居住する集落が長年、保津川の氾濫に悩まされてきたことや、夏場の渇水時における安定流量の確保＝営業日の増加というメリットも小さくなかった。

そのような中、当時の船頭たちにとって、こうした問題と向き合うことは河川改修に関連した用地買収などをめぐる、実質的には補償金の獲得に向けた条件闘争的な側面が強かったといえよう^[2]。また、当時の行政は「ダムのええことばかりしか言わはらへんだ」（70代船頭）というように、ダムのもたらす功罪両面にわたる議論はほとんどなされなかったという。しかし、船頭たちなどへの聞き取り調査によれば、ダム建設以降、水質悪化や濁水、河床の変化といった負の側面も目に見えて生じているという。

だが、こうした問題について協議をする場自体が設けられておらず、船頭の間からは「何をいうても、知らぬ存ぜぬで通される」（30代船頭）、「（洪水時に排砂などを）どきくさに紛れてやりよるけど、何の相談もない」（30代船頭）、「ダムが出来てから、水は間違いないく汚くなった」（70代船頭）という不満の声が聞かれる。また、「ダムのおかげという面もあるけど、あれ（補償金の受け取り）で結局は魂を売ってしまう

たようなもんや」（60代船頭）という声もあり、現在の保津川の河川管理に対する不満の声も少なくない。

その一方で、日吉ダム管理所（以下、ダム管理所）や土木事務所の職員は、船頭からのこれらの不満の声を「そんなこと（保津峡の土砂の堆積による河床の上昇など）があるとは、まったく知らなかった」（ダム管理所職員・土木事務所職員とも）、「河川環境の改善のために環境維持のための放水などいろいろ提案しても、なかなか理解をいただけない」（ダム管理所職員）という声もあり、現在の河川管理が利害関係者の十分な協議のもとに行われていないことがうかがえる。

また、漁協の組合員からも「川に関係している人たちの中には、補償金の様なものをもらっている関係から、ダムに対しての諦めが先行しているように感じる」（40代組合員）という指摘もあり、こうした巨大な公共事業とそれに関連する補償問題は、事実上の河川管理者としての地位を保ってきていた保津川下りの船頭組織や漁協のレジティマシーを少なからず弱めることとなったといえよう。



〔写真〕日吉ダムからの放流による濁水。京都府南丹市日吉町小道津にて2010年7月17日 筆者撮影。このときは、1週間以上濁水が放流され続け、漁協なども申し入れを行っている。

[1] 狭窄部である保津峡は、大雨による増水などで亀岡盆地に頻繁に洪水をもたらした。そのような中で、高度な操船技術を持つ船頭たちは、救助活動や交通手段の確保に活躍し、地域住民からは頼られる存在でもあった。

[2] これらの事業に際しての用地買収において買収対象地を確定させる河川区域と民地の境界については、1948年まで船を曳き上げていた「綱道」がその境界とされた。

祭りにみるナレズシ

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

5 月にはいと、至るところで太鼓の音が聞こえてくる。春の祭りの季節である。

5 月 5 日、守山市幸津川町の下新川神社では「すし切り祭」が行われた。712 年に創始されたこの神社の祭神・豊城入彦命は琵琶湖を



図 1 幸津川・下新川神社

西から渡って、この幸津川の地に着かれたという(図 1)。今でこそ琵琶湖から離れた平野部に鎮座しているが、古くは神社のすぐ前に船着場があった。そして、豊城入彦命に村人が差し上げたものがフナズシで、命はとても喜ばれたという。この言い伝えにちなんで、祭りでは村の若者がフナズシを切って神にささげるといふ神事を行うのである。

当番に当たった組長は、前年から大きなフナズシの準備を始める。祭り当日にフナズシを切る役の青年は、祭りの一ヶ月前から毎晩、フナズシを切る練習をする。枇杷の葉をフナズシに見立てて切り方を練習するのである。しかし、前年 5 月からフナを選んで塩きりし、飯につけるため、祭り当日ではまだ硬い骨などが残っているし、そのうえ子持ちのフナなので、切るのは相当むずかしいという。切ったフナズシは、まず神様に捧げられ、その後宮司をはじめ村の役職の男性や来賓に酒の肴として振舞われる。

この下新川神社でみられるような祭りの形態は、滋賀県各地の神社でみられる。そこには、フナズシだけでなく、様々な琵琶湖在来魚を使ったナレズシが用いられている(図 2)。

私がフナ以外の琵琶湖在来魚のナレズシをつけ始めたころ、ある人にこう言われた。「いろんな魚を使ったナレズシは淘汰され、フナズシが残ったのだろう。それなのに再度、いろんな魚を使ったナレズシを作って食べようとするのは、文化を逆行させ



図 2 祭りで使うナレズシの種類と神社

(『ふなずしの謎』滋賀の食事文化研究会 1995 p.127)

ることになるのではないかと。

確かにそうかもしれない。しかし、フナズシが選ばれたのは、琵琶湖のフナを使ったフナズシであったからである。それが最高に美味であったから。ところがこのフナが、琵琶湖ではなく他所で育ったフナでは、話は別である。これは美味ではない。滋賀県の、フナズシを食べ続けてきた人たちが自身それを証明している。「伝統文化」という名前のうえで、あぐらをかいてはいけない。各地の神社で行われている、様々な湖魚のナレズシを使った祭りには、そんなメッセージがこめられているのではないかと。

催しのご案内

■第36回 定例研究会

1. 日時：平成23年6月24日（金）17:00～20:00
2. 場所：京都学園大学バイオ環境学部
（京都府亀岡市曾我部町南条大谷 1-1、
JR 亀岡駅からバスあり）

3. 発表者、「発表題目」:

Dr. Khin Oo (キン ウー), Yezin Agricultural University, Myanmar, 「ミャンマーの農業改良普及事業について」
安藤 和雄, 京都大学 東南アジア研究所, 「生存基盤としての科学：東日本大震災と原発事故から考える」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
(担当: 矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

田んぼを守る理由

総合地球環境学研究所 アミ・A・ムティア

琵琶湖に近い地域の真野でも水田が少なくなりました。その傾向は全国と同様です。

昔は、琵琶湖岸の真野浜から比叡山や比良山のふもとまで水田が広がっていました。これらの田の灌漑のため、ため池が作られました。700年前のため池や、比較的新しい約400年前のため池が、今でも使われています。昔は山からの流水、湧水や雨水をため池にためていましたが、現在は、ため池の水を琵琶湖からポンプでくみ上げています。このような農業は、揚水ポンプの電気代などの維持費や部品の交換が必要で、とてもお金がかかります。

また、農業の機械化のために圃場整備事業も行われました。これによって棚田の形も変わってきました。整備されていない棚田には、草や木が生えて森に戻ってしまった棚田もたくさんあります。農業を行う人が少なくなっただけではなく、食糧をたくさん作る必要性がなくなったからです。昔の人は棚田が美しいから作ったのではありません。沢山の食糧を作るために必死になって山のふもとまで棚田を拓いたのです。とても大変な作業であったことと思います。

今は棚田を守るため、沢山のボランティア活動がありますが、手作業が大変なので継続できるのかどうか心配です(写真1)。なぜかという、手作業の農業はとても大変だからです。現在ほとんどの農民は各々機械を持っていますが、機械を使っても耕作地が減少しています。まるで、近代的な農業の維持のために日本の農民は機械を使っているようです。



写真1. 大津市の四十九枚棚田の手作業

それとは逆に、インドネシアのマニンジャウ湖の農民たちは、機械を使う事をそれほど望んでいません。なぜでしょうか。機械は子供を産まないからです。耕作には子供を産む水牛のほうが、機械よりもよいと彼らは考えます(写真2)。ミナンカバウの住民にとって、水牛(ミナンカバウ語でカバウ)はとても大事な動物です。伝統的な家屋にも水牛の角の形があしらわれています。伝統的な食べ物ルンダン(ココナツミルクや色々なスパイスと一緒に長く煮込んだ肉料理)は水牛からつくると、硬くておいしくなります。水牛の皮も、クルプッククリット(水牛皮せんべい)としてとても人気があります。また、水牛のフンも肥料になります。

政府は、農業の近代化のため機械化を進めていますが、農民はほとんど農業機械を使おうとしません。もし使うとしても、村全体で一台だけある機械を一部の作業にだけ、本当に忙しい時に使うのです。普通は、一年中いつでも稲を栽培できるので、農作業は田んぼごとにバラバラとなり一時期に集中しません。

また、水牛、アヒルや魚を利用し、とても環境に優しい稲作方法が取られています。アヒルは、ケオンエマスと呼ばれるカタツムリや害虫を食べてくれます。アヒルや魚は、小さい雑草を食べるので除草作業が楽になります。アヒルの産む卵は、塩卵として住民の重要な食材になります。魚は大きくなると販売され収入をもたらします。

水田は、このような多くの価値をもっています。その上、多くの食糧が必要なので、ミナンカバウの住民たちは昔のような水田を守る事ができるので



写真2. マニンジャウ湖周辺地域の水牛耕起